

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：23903

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26463459

研究課題名(和文) 高齢者の難聴が配偶者の身体的・心理的健康及び活動・参加に及ぼす影響の探索

研究課題名(英文) Factors Associated With Third-Party Disability in Spouses of Elderly with Hearing Loss

研究代表者

山田 紀代美 (Yamada, Kiyomi)

名古屋市立大学・看護学部・教授

研究者番号：60269636

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：難聴高齢者の配偶者に対して、難聴が配偶者に与える影響を配偶者の身体的、心理的、社会的な影響を探索した。その結果、配偶者の難聴高齢者に対しては、コミュニケーションに関する負担を感じながらも、老いの自然な姿として捉えていることも語りから確認できた。さらに、量的調査から、身体的な状況は約80%が普通以上の健康状態であり、心理的にはコミュニケーションの変更や関係性の変化に負担を感じていたものの、配偶者の主体的健康感が高い場合はストレスの感じ方が低く、配偶者の愛情の度合いが高ければ関係性の変化や変化した状況へ適応することへの情緒的な反応も低くなることが明らかとなった。活動・参加はほとんど影響がなかった。

研究成果の概要(英文)：This study was designed to explore how the involvement of elderly people with hearing loss with their spouses affected the spouse's physical, psychological, and social health and to elucidate factors influencing those effects. Results show that 12 spouses felt burdened by communicating with elderly people who have hearing loss. However, some positively accepted it as a natural aging-related process. Another 151 spouses felt burdened with communication, as found in earlier studies, and with changes in the relationship. When a spouse's subjective feeling of health was high, the spouse had low psychological stress. When a spouse's affection score was high, the spouse's emotional responses to changes in the relationship and adaptation to the changes were low. The spouse's activities and participation in society were only slightly affected.

研究分野：高齢者看護学

キーワード：高齢者 難聴 配偶者 ストレス コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

高齢者の多くは、加齢による聴覚の生理的变化によって難聴をきたしている。過去 3 年にわたる疫学研究で、65 歳以上高齢者の 1500 万人超に難聴があると試算されている。難聴の高齢者は、聞こえの低下の認知に関連した精神的健康度の低下が起こりやすいこと、また難聴による周囲とのコミュニケーションの問題から社会的孤立へ、さらには認知症発症との関連性も報告されている。

この様な理由から、難聴を予防し、さらに早期に発見することが重要である。加齢性の難聴は、蝸牛の感覚細胞あるいは蝸牛ニューロンの変性・消失が原因であることから根本治療は難しいものの、早期発見により補聴器装用を促し聞こえを確保することで質の高い生活が可能となる。しかし、高齢者自身が難聴を自覚し、なおかつ自分の問題として認識し、補聴器を装用する行動に移すまでには、ある程度の時間とプロセス、支援が必要であり、現状においては、それらの解明に努力が払われている段階といえる。

難聴の自覚のない、あるいは難聴を指摘されてもなお「否定」している高齢者に対しては、難聴の事実の認知あるいは受容を促す援助と共に、難聴高齢者がコミュニケーションの障害により孤立に陥らないような意図的なコミュニケーション対策が求められる。特に、共に暮らす家族に対しては後者に対する援助が期待される。しかし、難聴高齢者とコミュニケーションをとる家族について、配偶者は多大な情緒的支援とコミュニケーション上での努力が求められることが、配偶者の苦痛を作り上げていることが先行研究で述べている。

2001 年に World Health Organization (WHO) は、リハビリテーションの新たな概念である International Classification of Functioning, Disability and Health (以後、ICF という) の枠組みを提案した。この概念枠組みの中で、難聴の高齢者と共に暮らしコミュニケーションを行う必要がある配偶者は、"third-party disability" (非当事者あるいは第三者の障害) として位置づけられている。この "third-party disability" にある配偶者は、難聴のパートナーとのコミュニケーションの結果として、健康状態は低下していないものの能力障害を体験していると述べている。その後この ICF の概念枠組みを難聴高齢者と配偶者間に応用した Scarinci. N らの質的研究において、「コミュニケーション」「家庭生活」「対人関係」「地域、社会生活」の 4 側面で、「活動制限」と「参加の制約」が見られたと報告している。さらに、Scarinci. N らは、上記の研究から導き出された要因をもとに第三者の障害に特化した尺度を作成し、配偶者の能力障害に関連する要因を導き出している。このように諸外国では、高齢者の難聴を当事者のみでなく家族も含めて、健康に包括的な概念を援用し、精力的な研究が押

し進められている。

それに対して本邦では、難聴高齢者の家族の研究として、同居する家族のコミュニケーション上の困難な実情報告、あるいは家族を補聴器装用状況における他者評価者として位置づけたものがいくつかあるのみである。

そこで、難聴の高齢者を取り巻く家族の中で、配偶者が難聴高齢者とのコミュニケーションや関わりにおいてどのような状況にあるのか、さらに、難聴高齢者の配偶者の健康状況やコミュニケーションの実態およびそれらに関連する要因を把握し、その解決策を明らかにすることは喫緊かつ重要な課題であるといえる。

2. 研究の目的

本研究においては、難聴高齢者と共に暮らす配偶者に対する影響を「身体的・心理的ストレス」のみならず ICF の概念も併せて適用し、生活機能としての「活動」及び「参加」の実態を質的、量的に把握すること、さらにはそれらに影響する要因を明らかにすることの 2 点を目的として実施するものである。

3. 研究の方法

本研究では、以下の 3 段階における研究を企画した。

(1) 第 1 研究

本研究では、ICF の概念における「third party disability」(第三者の障害) に関する先行研究として、Australia の Scarinci N らの作成した尺度の翻訳を行い使用可能性の検討することである。

はじめに、Scarinci N. の作成した Significant Other Scale for Hearing Disability (SOS-HEAR) 尺度の翻訳について Scarinci N に使用の許可を得た。続いて研究者が日本語に翻訳し、その後英語及び日本語に堪能な者がバックトランスレーションを行い、その後原文を忠実に翻訳できているかどうかを英語に堪能な研究者を交えて確認した。さらに文章の表現における回答のしやすさについては、複数の高齢者看護の研究者が確認を行い最終的な質問紙を作成した。

(2) 第 2 研究

本研究は、難聴高齢者の配偶者が日々のコミュニケーションや生活で感じる、「難聴」に対して抱いている気持ちや思いを明らかにすることである。

対象は、以下の方法で集めた。A 市 B 区の社会福祉協議会主催の「地域健康づくり事業」参加高齢者を対象に「難聴が人の健康に与える影響」に関する講演会を 8 会場 (一会場の参加者は 20 名前後) で開催し、講演会終了後、参加者に対して、難聴高齢者の配偶者で「ある」こと、配偶者自身の聴力は「低下していない」の条件をオーディオメータで確認できた者とした。さらに、C 大学附属病院耳鼻科外来に「難聴」を主訴として通院中の

65歳以上の高齢者の配偶者で、上記の条件と同じく聴力の低下が無い者とした。加えて、A市のシルバー人材センター登録者で、難聴の高齢者と暮らしていることを条件に募集し、応募者本人に聴力の低下がないことが確認できた者とした。

本研究は、名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会および名古屋市立大学大学院医学研究科倫理審査委員会の承認を得て実施した。

以上の3種類の募集方法にて合計23名の対象者を集めることができた。しかし、配偶者自身も難聴であった者、調査場所に出向いて来た者の続柄が配偶者とは異なる者、配偶者の聴力が確認できなかった者、途中で調査を棄権した者などを除き、最終的な分析対象者は12名となった。

(3)第 研究

本研究は、第 研究で作成した SOS-HEAR 邦文版を用いて、難聴高齢者の配偶者のストレスの実態を把握するとともに、難聴の高齢者とその配偶者における関係性、外出や社会参加の状況も調査することとした。さらに、SOS-HEAR や外出等に関連すると考えられる要因も併せて検討を行った。

対象

対象は、2017年11月時点において、市場調査会社にモニター登録している者の内、難聴をもつ65歳以上の高齢者と同居している65歳以上の配偶者で、なおかつ調査への参加に同意した者である。なお、難聴「有」の評価方法については、一般社団法人日本言語聴覚士協会学術研究部、成人聴覚小委員会が作成した家族・介護者のための質問紙の13項目の内、難聴の診断を受けている者も含め、1項目でも該当した者とした。始めに、調査会社(株)日本能率協会総合研究所が、60歳以上で有配偶者のモニター3422名に対し、難聴の有無をスクリーニングするために、先の質問票をファックスにて送付した。その結果、難聴の条件を満たし、かつ、調査への協力を内諾した者が345名であったが、その中から高齢者及び配偶者ともに65歳以上の者285名を抽出した。この285名に調査票を郵送したところ、240名から返送があった。これらの内、一項目でも欠損のあったものや難聴高齢者ないしは配偶者のいずれかが要介護認定を受けている者は除き、最終的には151名を分析対象とした。なお、調査における対象者の抽出及びスクリーニングのためのファックス送付、調査票の郵送など、全て調査会社の実施し、完全匿名化して調査データが作成された。

調査方法

研究対象者(難聴高齢者の配偶者)には調査票を郵送し、自記式で回答を依頼した。

- ・配偶者の状況

配偶者自身の性、年齢、家族構成、職業の有無、難聴の有無、主観的健康感、外出頻度と交流頻度 等

- ・難聴のための関係者尺度(SOS-HEAR)
第1研究において研究者が翻訳した尺度

- ・高齢者夫婦の愛情尺度

第2研究における配偶者からの聞き取りにおいて、難聴高齢者に対する思いやりや同情などの夫婦の愛情が結果として得られたために、本尺度の測定を実施した。

この尺度は、伊藤、相良らが作成したもので、16項目1因子からなり、「いつもそうだ」4点、「たいていそうだ」3点、「たいていそうではない」2点、「いつもそうではない」1点の4件法で尋ねた。尺度の使用については、著者の了解を得た。本尺度の使用にあたり Cronbach の係数を確認したところ、0.951と十分な値であった。

- ・難聴高齢者について

配偶者に対して、難聴の高齢者の性、年齢、要介護認定の有無、健康状態、聞こえに関する既往の有無とその病名、外出頻度、交流頻度、難聴の自覚の有無等を質問した。

分析方法

SOS-HEAR 尺度は、因子毎の合計点を算出し、その因子合計点と主観的健康感、愛情尺度、外出頻度、交流頻度との関連を相関係数で確認した。なお、分析は SPSS Ver22.0 を用いた。

倫理的配慮

本調査は、名古屋市立大学看護学部研究倫理委員会の承認をうけて実施した。

4. 研究成果

(1)第1研究

Scarinci N. の作成した Significant Other Scale for Hearing Disability (SOS-HEAR) 尺度は表6因子27項目で構成されていた。その回答方法は、「問題はない」「少し問題である」「中等度問題である」「とても問題である」「完全に問題である」の5件法であったが、著者による先行研究では、回答者の7-8割程度が「問題はない」と回答し、「とても問題である」及び「完全に問題である」の二つを併せても1割程度であったこと、さらに高齢者に質問する場合、選択肢が多いと欠損値が多くなることを考え、「とても問題である」と「完全に問題である」を併せて4件法で質問することとした。また、原本は各項目に対する問題の重大性の程度を質問する方法であるが、日本人にはあまりなじみがないため、各項目についてどの程度「そう

思うのか」に改変し「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の4件法とした。

なお、邦訳した尺度において、因子毎の Cronbach の係数を確認したところ、「コミュニケーションの変更」「コミュニケーションの負担」「関係の変化」「外出と外交」「適応への情緒的反応」「配偶者に対する気遣い」の6因子において、0.898～0.728であり、信頼性は十分であった。

(2)第 研究

対象者は、男性5名、女性7名で平均年齢は、78.3歳であった。聞き取りのデータを文字に起こし、文脈の意味を吟味しながら分類したところ以下の様な結果が得られた。「テレビの音が大きくていらいらする」、「夜通しラジオを大音量で聞いているのでうるさくて眠れない」、「会話の声が大きすぎて隣の家まで聞こえているようだ」などの【自分を基準にした音量設定】、「何度も同じことを聞いてくる」、「聞こえるようにはっきり話して欲しいとってくる」など【自分の理解にもとづいた会話の要求】など聞こえに関わるストレス認知について抽出された。さらにそれ以外に「会議で相手の声が聞こえているか心配になる」や「自分と娘・孫との会話に入っただけで、一人で料理だけ食べている」姿を想像したり実際に経験して感じている【聞こえづらさへの同情心】や「聞こえにくい状況はこの先自分も歳を取れば同じようになる」といった【老いの姿としての難聴の受容】を配偶者の姿を通して感じている状況も抽出された。一方、「大声で一方向的に言いたいことだけを言うだけなので、萎縮した気持ちになる」や「聞こえにくいために会話もほとんど無い」ことから【距離をおいた関係】が伺えた。

以上から、配偶者は難聴の高齢者に対してストレスだけではなく、同情心や自分自身の老いの受容にまで思いを巡らせていることが明らかとなった。

(3)第 研究

研究対象者である難聴高齢者の配偶者151名は、男性48名(31.8%)、女性103名(68.2%)で、平均年齢は73.8±4.6歳であった。配偶者の主観的健康観は、普通以上が121名(78.8%)であった。SOS-HEARについては、表1のように「コミュニケーションの変更」12.9±3.5点で最も高く、「コミュニケーションの負担」10.7±3.7点などであった。

表1 SOS-HEAR 得点

因子名	得点	平均値	標準偏差
コミュニケーションの変更(6項目)	24点	12.9	3.5
コミュニケーションの負担(6項目)	24点	10.7	3.7
関係の変化(3項目)	12点	5.0	1.9
外出と外交(4項目)	16点	7.0	2.3
適応への情緒的反応(5項目)	20点	9.6	3.2
配偶者に対する気遣い(3項目)	12点	5.9	1.9

SOS-HEAR と他の変数との相関係数を確認した。結果は、表2のように、主観的健康観

表2 SOS-HEAR 得点と他の変数との相関

	主観的健康感	愛情尺度	外出日数	交流日数
コミュニケーションの変更	-0.191	-0.208	-0.152	-0.128
コミュニケーションの負担	-0.218	-0.257	-0.049	-0.106
関係の変化	-0.286	-0.420	-0.108	-0.164
外出と外交	-0.292	-0.115	-0.099	-0.094
適応への情緒的反応	-0.236	-0.454	-0.118	-0.137
配偶者に対する気遣い	-0.201	-0.126	-0.046	-0.038

註) 強調文字; p<0.01, 下線; p<0.05

は、コミュニケーションの負担($r = -.218$)、関係の変化($r = -.286$)、外出と外交($r = -.292$)適応への情緒的反応($r = -.236$)と有意($p < 0.01$)な負の相関が認められた。すなわち、主観的健康感がよいほど、難聴に伴う配偶者のコミュニケーションの負担や外出等への影響が少なかった。愛情尺度については、適応への情緒的反応($r = -.454$)、関係の変化($r = -.420$)、コミュニケーションの負担($r = -.286$)が有意($p < 0.01$)な負の相関が認められた。これは、相手に対する愛情があるほど、関係の変化が少なく、適応への情緒的な反応が少なく、コミュニケーションの負担も少ないということであった。また、交流頻度については、関係の変化が少なく配偶者が家族や近隣との交流が多くなるという負の相関($r = -.164$; $p < 0.01$)が認められた。

5. 主な発表論文等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 紀代美 (YAMADA Kiyomi)
名古屋市立大学・看護学部・教授
研究者番号：60269636

(2)研究分担者

西田 公昭 (NISHIDA Kimiaki)
立正大学・心理学部・教授
研究者番号：10237703

(3) 研究分担者

高橋真理子 (TAKAHASHI Mariko)
名古屋市立大学・大学院医学研究科・助教
研究者番号：00336687

(4) 研究分担者

蒲谷嘉代子 (KABAYA Kayoko)
名古屋市立大学・大学院医学研究科・助教
研究者番号：50569259